～文化的歴史的所産を巡る～

残したい情景

第45回 和歌山県和歌山市

一般財団法人 日本不動産研究所

大阪以南最大の「ぶらくり丁商店街」3大学誘致で再生の機運

ぶらくり丁商店街は、南海和歌山市駅とJR和歌山駅との間に位置し、和歌山市のシンボルである和歌山城、金融機関や賃貸事務所が集積する本町通りおよび和歌山市役所などから徒歩圏内という中心市街地に位置する商店街である。本町、ぶらくり丁、中ぶらくり丁、東ぶらくり丁、ぶらくり丁大通り、北ぶらくり丁の6つの商店街から構成され、その歴史は江戸時代までさかのぼる。

栄華を極めた繁華街

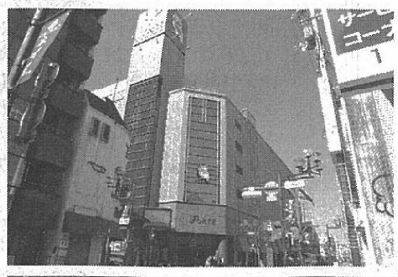
1830年にこの一帯が大火により焼失した後に、商人が集まってきたのが商店街の始まりと言われており、以来、和歌山城の城下町の一部を形成し、紀州藩を代表する繁華街、歓楽街として栄華を極めていた。また、ぶらくり丁という名前の由来は、軒先から店内いっぱいに商品をぶら下げて陳列したことから定着した名前であると言われている。

商品をぶら下げて陳列したことからその名が定着した「ぶらくり丁商店街」

明治以降も和歌山市の繁栄を背景に、ぶらくり丁は和歌山県を代表する大阪市以南でも最大の繁華街として繁栄した。買い物客の前には人の頭しか見えないほどでまっすぐ歩けないとまで言われたくらいにぎわう繁華街であったとのことであるが、その当時の写真などを見ると、その話も十分に理解できる。

しかし、昭和50年代後半頃をピークに和歌山市の人口は減少傾向となり、また、モータリーゼーションの進展に伴い、和歌山市の人口・商業等は、和歌山市中心部からその周辺部や郊外へと流出し、ぶらくり丁は衰退していくこととなった。そして、00年代初頭頃を中心とした大規模小売店舗の閉店や、その後の映画館の閉鎖により衰退傾向は一気に加速した。集客施設がなくなったぶらくり丁は、通行量の激減、空き店舗の増加で、近年ではシャッター通りと化している。

このようにぶらくり丁を含む中心市街地の空洞化が進む中、和歌山市を主体に、中心市街地活性化への様々な取り組みが行われたものの、活性化には至らなかった。一方で、14年2月に和歌山市より報告された「和歌山市まちなか再生計画」は、旧来の行政主体ではなく、市民が主体となってまちづくりを進めようとすることを期待して計画されたもので、近年では数々の事業が具体的に動いている。特に、期待されるのが次の事業である。



大規模小売店舗跡地に開発された「フォルテワジマ」

(下)シャッター通りと化した北ぶらくり丁内

市中心部の人口減少、少子化に伴う学校再編がきっかけで、閉校した雄湊小学校、本町小学校、伏虎中学校跡地の有効活用である。当該跡地では、若年者層の流出に歯止めをかけ、中心市街地のにぎわい創出のため、「まちなか3大学の誘致」が行われた。

学生数は1000人超

1校目として、旧雄湊小学校では、18年4月に東京医療保健大学の和歌山看護学部が開学した。2校目は、19年4月に本町小学校跡地に開学した和歌山信愛大学教育学部子供教育学科である。そして3校目は、21年4月に、伏虎中学校跡地に開学予定の和歌山県立医科大学薬学部である。3校で収容定員は1000人以上の学生数となる。

これらの事業で、和歌山市はかつてのように市内中心部に大学が位置することとなり、若者が中心市街地に戻ることにより、中心市街地のにぎわい創出が期待される。ぶらくり丁商店街も、若者をターゲットとした店舗の開業など、商機を生かす絶好の機会ではないかと思われる。

約190年前から和歌山県最大の商業集積地として栄え、親しまれた「ぶらくり丁商店街」。今回の商機を生かして、かつてのにぎわいを取り戻してほしい。（和歌山支所不動産鑑定士　土田正顕）